



Vol.32 2012年8月1日

会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

◆ 新機構長から 機構長就任にあたって

吉武良治（日本アイ・ビー・エム株式会社）

今期より機構長を務めさせていただくことになりました吉武です。発足から来年で10周年を迎えますが、次のあらたな10年へ向けて認定人間工学専門資格制度の着実な継続と発展に取り組んでいく所存ですので、これからどうぞよろしくお願いいたします。



準備期間も含めるとすでに立ち上げから10年以上が経過し、IEA認証取得やジュニア資格の立ち上げ、試験制度や再認定制度の整備と着実な運営など、多くの成果と安定したしくみが確立できています。これらは藤田初代部会長、青木前機構長のリーダーシップ、そして幹事会メンバーや関係者のみなさまのご尽力の賜物です。あらためて敬意を表するとともに感謝申し上げます。

4月の総会のときに、就任にあたって、これまでの組織やしきみを堅実に継続していくとともに、「これまで以上に認定された人間工学専門家のみなさんが“この資格を取得してよかった！”と思えるように推進していきたい」、という思いをお話させていただきました。6月に九州大学で開催された第53回大会のシンポジウム「人間工学専門家の魅力と実力」でも、専門家のみなさんから活躍の様子やその意義などを紹介していただき、うれしく感じたとともにもっと広く共有していければと思います。対象エリアが異なっても同じ人間工学専門家として活躍されている事例は、いろいろなヒントが得られるものです。これから具体的な施策は、専門家のみなさんと一緒に考えていきたいと思っていますが、次の

ような検討は早急に進めたいと思います。

- (1)人間工学専門家の認知度の向上（学会内各組織との連携企画、他学会との連携、Webサイト活用等）
- (2)人間工学専門家のスキルアップや成長支援（会員同士の交流機会や事例共有方法検討、SNSの活用等）

今年、表彰委員会、広報委員会とともに立ち上げた「人間工学GP賞」は、通称が「専門家100人が選んだ人間工学グッドプラクティス賞」であり、専門家の認知度向上に貢献しています。また受賞した事例がいろいろなところで紹介される際、推薦した人間工学専門家が登場することもあります。この賞をさらに盛り上げていくとともに、同じように認知度向上につながる企画を検討していきたいと思います。また、今年は認定人間工学専門資格制度のWebページのリニューアルを進めています。学会のWebページとも連携して専門家のみなさんがアピールできるページも検討していますので、可能な範囲で情報発信もお願いできればと思います。

近いうちに専門家のみなさんからのご意見やご要望を収集する目的でアンケートの実施を計画しています。専門家一人ひとり、事情が異なりますので、個別の要望や意見をおもちだしたいと思います。すぐに対応できないかもしれませんが、きちんと状況を把握してより有益な資格となるよう検討していきたいと思います。アンケートの実施に限らず、専門家のみなさんからの意見等、歓迎しますので、気軽にご連絡ください。一緒に盛り上げていきましょう。

◆ 前機構長から 機構長退任にあたって

青木和夫（日本大学大学院理工学研究科）

2007年から2012年までの第3期、第4期の部会長と機構長を務めてまいりましたが、この度、吉武良治氏に無事バトンタッチすることができました。会員の皆様のご協力の賜物と感謝いたしております。

私は第1期、第2期の部会長であった藤田祐志氏が専門家部会の基礎を作られたあとを受けて、人間工学専門家資格制度の広報や専門家同士のコミュニケーションや研修の場を拡大することを活動の目標にしました。具体的な内容については、本会報のVol.12に書かせていただきましたが、これを読み返してみると、達成できたものとそうでないものがあることを改めて認識させられます。

私が部会長になった最初の大きな出来事は、IEAのエンドースメントを取得したことでした。これは藤田前部会長のなされた仕事でしたが、ちょうど私が部会長に就任すると同時に取得のニュースがはいり、たいへんうれしく思った次第でした。

その後の大きな課題は、2003年に認定された最初の専門家の再認定でしたが、再認定制度がうまく機能し、大部分の専門家が再認定を行ってくれたことで安心いたしました。また、日本人間工学会大会で専門家のセッションを設けたり、CPEセミナーと称して、会員の所属する研究施設などの見学を含めた研究会を行うことができました。このセミナーはたいへん好評で、受け入れてくださった専門家の方々と参加してくださった専門家の皆様にはたいへん感謝いたしております。

2009年7月の日本人間工学会の一般社団法人化に伴って、認定人間工学専門家部会から人間工学専門家認定機構と名称が変わりましたが、活動は継続して行われてきました。今後は吉武機構長を中心に、ますます活発に活動が行われてゆくことを期待しております。機構会員の皆様もこれまで同様、活動への積極的な参加をいただきたくお願い申し上げます。

➡ 会員からの報告

人間工学と出会って

西岡基夫 (大阪市立大学大学院生活科学研究科 助教)

昨年6月、人間工学専門家の認定を取得させて頂きました。取得に当たり、関係各位には多大なご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げますと共にご尽力に感謝いたします。ありがとうございました。

私が大学に入って人間工学と出会ってから二十余年が経ちました。振り返ればその殆どの場面で誰かに迷惑をかけ、困らせ、そして助けってもらって来ました。それでも未だに「人間工学とは何か」が分からず、右往左往する毎日です。研究や教育の活動を「カタチ」にすることばかり求められ、本当に知りたいこと、伝えたいことの本質について向き合える時間を保てない中で、少しでも人間を知ることの楽しさや難しさを自身も体得し、また広められればと日々悪戦苦闘しています。

大学卒業後、自動車シートメーカーやリハビリテーションセンターで設計・開発に携わりました。実際の現場で人間工学を活かす難しさと活かすために必要な様々な分野の知識の乏しさを痛感させられた時代でした。私に人間工学を授けて下さった先生から「人間工学を専門にしています、と言うヤツは信用ならない。何かの対象を人間工学的に研究している、つまり様々な知識を融合させて人間の生活に活かそうとすることが人間工学の正しい使い方だ」と教わった意味を卒業後に実感することになりました。その後、ご縁があって現職に就かせて頂き10年が過ぎました。私の様な半人前が人様にものを「教える」というのはどうしても不遜な気がして、今でも私の授業は「教える」ではなく自分の経験してきた「人間工学的に考えること」を学生さんに「伝える」ことで精一杯です。

エンジニアとして勤めていた時に強く感じていたのは、人間工学の考え方は単にヒトの快適性や負担軽減を考えるだけでなく、異なる分野の専門家同士をつなぐ「パイプ役」としての機能も持っているのではないかと、という点です。より良い生活環境を提供するためにどのように各専門分野を連携・構築させていくかを考える上で、ヒトを良く知り、ヒトのためを探求する人間工学は重要な「つなぎ」になり得るのではないかと考えています。人間工学の専門家としてまだまだ駆け出しですが、社会に還元できるような研究成果を発信し、またパイプ役となる人材の育成に心がけながら、人間工学普及のお役に立てればと思っています。

執筆者自己紹介

西岡基夫:千葉工業大学大学院卒業後、高島屋日発工業株式会社(現:トヨタ紡織株式会社)にて自動車シートの設計・開発を担当。その後、大阪市立大学大学院へ進む傍ら兵庫県立福祉のまちづくり研究所にて車いすの改造や住宅改修などを担当。2002年より現職。



報告

平成24年度 総会・講演会

4月19日、中央大学駿河台記念館にて開催された総会・講演会につきましては、前号にて一報いたしました。本号にてお二人のご講演内容を報告いたします。

●講演「生涯現役な専門家を目指して」

(日産自動車株式会社 伊藤一也 氏)

今日は、自分がこうしていきたいという初心表明に近いような話をさせていただきます。

私は、1999年に日産自動車に入り、道路交通システム ITS の分野に配属されました。2001年に、ドライビング・シミュレーターに関する専属技術者の社内公募に手を挙げ、人間工学の業務に関わるようになりました。専門は、ドライビング・シミュレーターを使った運転行動や意識の評価です。また、学生時代からやっている音楽音響学や、コンピュータ・シミュレーション、電子回路の設計などが専門分野です。



趣味を3つご紹介します。まず、モータースポーツ。全日本ラリー選手権に出たこともあります。2つ目はバイクで、この年になって教習所に通っています。若い人のように思うように体が動きにくく運転に苦労している経験を通して、人間の特性を体感しています。3つ目は、コンピュータ・ミュージック。以前シャープ X68030 というパソコンを利用していました。マウスなどのユーザーインターフェースが当時としては画期的で、これがきっかけで、私の人生は、大きく変わったように思います。

私は、2009年に専門家試験に合格しました。2008年に起きた金融危機や、先輩たちが職場を離れていって我々世代が業務の中心になり危機意識を持つようになったこと、弊社でグローバルで通用する人材が求められていることが、専門家を目指したきっかけです。

業務事例と、そこで感じたことをお話しします。

まず「商品開発用ドライビング・シミュレーターの導入」についてお話しします。これは、ドライバーの運転中に操作する機器の利便性や安全性を評価するためのシステムです。代表的な機器には、ナビゲーション、オーディオ、エアコンなどがあります。ドライビング・シミュレーターでの重要な運転感覚として、例えば、ハンドル

を動かしたときの体性感覚があります。これは、車の下に置いてあるプラットフォームという台が、前後左右、上下、回転方向に動くことで表現します。これを制御するためのアルゴリズムを組んで、ブレーキをかけたときの立ち上がりや減速しているときに、氷の上を滑っているような感覚にさせないようにしたりしています。このような事例の積み重ねによって、ドライビング・シミュレーターを人間工学実験業務で適用できるようになりました。

また、この業務を通して、人間工学だけでなく、ドライビング・シミュレーター実験に関わる様々な知識や能力を備えることが重要と感じました。システム側の知識を持つことで、実験できることや注意すべきことなどが分かってくる。やはり、勉強が第一だと実感します。また、異分野出身でも、人間工学の分野で活躍できる場はあることを感じました。

次に、「脳波計測による音声操作システムの評価」は、シミュレーターと実車の両方を使った、車の音声操作システムの評価です。カーナビゲーションなどの機器を運転中に手で操作すると運転に影響が出てしまいます。運転中の操作を禁止している機能もありますが、一方で、色々な機能を使いたいというニーズも存在します。それに対応するために、運転操作に影響を生じにくい音声操作システムをより良くしていくよう、開発を進めています。

例えば、身体を使った操作に対して、音声操作が有利であるか、運転中に車の周りの障害物や建物など目に見えるものが、どれだけ頭の中に取り込めたのか、脳波の事象関連電位の1つである眼球停留関連電位を使って示した事例があります。これは、運転中に取り込んだ情報を、眼球関連電位の振幅で比較します。運転のみの状態、ラジオを聞きながら運転している状態、音声操作している場合で簡単なものから難しいもの、そして、手で操作した状態で運転中にやってよい操作と禁止されている操作で比較しました。禁止されている操作をしている時は、周囲の情報を取り込んでいるようであり取り込んでいない、信号無視などにつながりかねない状態がデータに現れています。一方、音声操作は周りの状況を見落とす可能性は少なく、運転中でも差支えないレベルです。これは実車でも実施し、同じ傾向になるとことを検証しています。

この業務は、(独)産業技術総合研究所と一緒に実施しました。社外の方との共同研究はこれが初めてでした。

この時に感じたことですが、基礎研究とプロジェクトの実験の間には意識の面でギャップがあると思います。基礎研究のメンバーは、自分たちがやっていることに重きを置きますが、商品のライン業務をやっているメンバーには、すぐに商品に使えるものを出して欲しいという意識があります。私は両方の事情を知っているだけに、このギャップを埋めるのに苦労しました。特に、外部の機関と共同研究を行う時は、上に挙げた両方の視点から適用できる技術を見極めることが、人間工学の技術者、特に基盤研究や先行開発の立場にいる人に求められていると感じました。

また、今年の3月までの2年間、人間行動の計測技術開発業務に従事していました。運転中に、どのタイミングで、どういう行動をしているのか。また、その時の心理状態はどうなっているか。これらのつながりを見られるようにする計測技術の開発に取り組んでいました。その1つである視線計測装置は非接触型で、運転者には何も装着しません。ダッシュボードに視線計測用のカメラを3つ設置します。これで、顔の表情の特徴点、顔の向き、頭の位置、目の向きを同時に計測します。もともとは机の上で使う装置ですが、温度条件が厳しく振動が多い自動車でも使えるシステムに改造し、様々な開発業務で使えるようになりました。一例として、私がテストコースで高負荷条件で走行中に車線を逸脱したときの映像をご紹介します。このとき、視線がどこを見ているかなどを、車速やハンドルの操舵量などと同時に記録し、後から何が起きていたのかが一目で分かるようなシステムになっています。

実は、この業務のチームリーダーは、人間工学は専門外だった人でした。最初は私が人間工学について色々教えていたのですが、徐々に、私よりもストレートにシンプルに考え、提案するようになっていました。いつの間にか、自分が細かいことに目が向き過ぎたり難しく考えすぎているのではないかと、さらにそれが原因で、自分の説明が専門外の人に分かりにくくなっていたのだと気づきました。この経験を通して、基本に立ち返ってシンプルに考えることが重要だということ、相手に分かりやすく伝える心構えを持つことが必要だと思いました。「基本」とは、自動車の場合、認知、判断、操作という、運転のループと言われているものです。この運転のループに立ち返った上で、分かりやすく話をしていこう、その心構えを持とうと感じました。

そして、私は、生涯継続して現役の専門家であり続けたいと考えています。具体的には「次の世代に技術や知見を継承する立場になりたい」と願っていますが、この事を深く考える機会となった事例を紹介します。

自動車技術会では、大学生や専門学校生による全日本学生フォーミュラ大会を毎年開催しています。国内外の90校弱の学校がエントリーし、事前審査を通過した75校の学生が、自分たちで車を作って、本番に臨みます。ここで昨年の優勝校、上智大学の車両を紹介します。



写真1：学生達がフォーミュラ車両を開発

(提供：上智大学／2011年大会優勝校)

写真を見ただけでも良くできている印象ですが、写真では隠れた部分のサスペンションなど、機械系の人にとっては垂涎の内容がたくさん盛り込まれています。シートを外した下には、スーパーチャージャーなどのメカがあり、熱の問題など学生なりによく考えられています。一方、ユーザーインターフェースは、ステアリング周りにインジケータやスイッチをつけて、そこにラベルを貼っています。スイッチ類はエンジンスタートスイッチなどがあります。当時、当該車両のドライバー以外には全く意味が分からないユーザーインターフェースだと思いつながら見ていました。

この大会において、私はドライバーの安全装備の走行前チェックを取り纏めていました。ドライバーが装着するヘルメットやベルトなど、これまでは安全基準が明文化されていなかったものを基準化しました。これは去年の大会での一番大きな出来事でした。また、各競技車両を見ると、ドライバーの運転の姿勢、安全装備の付け方、設計の仕方まで、安全をあまり考慮していない大学が多かったと感じました。ドライバーの体格に合ったシートの形やペダルのレイアウトなど、考慮して作っている大学と、単に鉄板にシート代わりのスポンジを貼っただけの大学と、両極端だった印象があります。

ここで、人間工学的な事例を1つ紹介します。実は競技中にアクセルとブレーキペダルを誤って共踏みしてしまい、障害物にぶつかった大学がありました。写真は、

その当該車両の大学からご提供頂いたペダル周りの写真です。

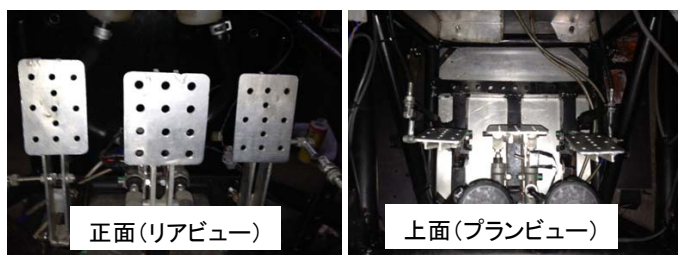


写真2：競技中に共踏みした車両のペダル周り
左から、クラッチ、ブレーキ、アクセル

ここで、アクセル、ブレーキ、クラッチと並んでいますが、形が同じで区別が付きにくく、アクセルとブレーキのペダルの奥行きも、ほぼ同じです。つまり、ペダルのストロークの範囲やペダル形状が不適切だったために、共踏みしてしまうのです。では、どうすべきかを考えてみました。例えば、ペダルの段差をつけ、アクセルペダルを車両前方に移動する。その前提としてブレーキペダルのストロークを検討する。ブレーキをグッと踏みながら、踵でアクセルペダルを踏むような運転テクニックもあるので、アクセルペダルの面を下方に長くする。ブレーキをきちんと踏めるようにペダルを広げる。等が考えられます。これらは、人間工学に関わっている方なら、すぐに気付くと思います。

この事例から、私たち専門家が次の世代のためにできることを考えてみました。モータースポーツには、長い経験を持つプロがいます。プロは実践が基本で、そこから得た経験則や現場ノウハウなど色々なものを大事にします。一方で我々のような専門家は、人間工学の学術的、工学的な知見や技術を持っています。この2つを融合することが、我々が次の世代のためにできることではないかと考えます。そうすることで、学生たちが人間工学のスキルを向上させて車両の完成度を上げ、それが、チームの成績アップ、ひいては、日本のモノづくりの向上を実現できるのではないかと考えています。

以上を、私の決意という観点で話をまとめます。

1 つ目は、業務経験を通して感じたことを、忘れないようにしていきたいと考えています。異分野の出身でも人間工学の分野で活躍できる、そういう自信を持てるということ、自分の考え方や、意識を世の中に向けること、基本に立ち返ってシンプルに考えることが不可欠です。

2 つ目は、人間工学の専門家としての責務を果たして

いきます。自分の専門性に誇りを持ち、誠意をもって問題解決に貢献していきます。自分が知らない専門外のことは、素直に認めて自己研鑽したいと思います。

3 つ目は、常に高い志を持って1年後の自分の姿を描くことです。1年だと短いような気もするのですが、近い目標を立てるのは、重要だと思います。

最後に、専門家というより一個人の視点ですが、色々な人と関わり、相手から「ありがとう」と言われることが何より嬉しいです。それを心の糧に、私も相手への感謝の気持ちを忘れないようにします。そして、次の世代に技術や知見を着実に伝承していき、モノづくりの質向上を実現し、社会に貢献していきたい。そのために、私は生涯現役の人間工学専門家としてあり続けたいと思っています。

●講演「使ってみたいモノづくり」

(シャープ株式会社 倉持淳子 氏)

今日は、シャープという会社と私の自己紹介をさせていただき、そのあと、私の研究テーマである「使ってみたいを考える」について、そして、その考え方を商品開発にどう組み込んでいるのか、事例を紹介して、最後に今後の課題をお話しします。



シャープ株式会社は、9月に創業100周年を迎えます。総合家電メーカーとして、液晶テレビ AQUOS、スマートフォン、ソーラー発電パネル、LED照明、白モノ家電、ビジネス系ではBIG PADという電子黒板、複写機など、いろいろな分野をやっています。

シャープは、世の中に無いものを作りたい、という遺伝子を持っている会社です。早川式繰り出し鉛筆という、創業者が作ったシャープペンシルも、会社の歴史ホールに、いろいろなバリエーション商品が飾られています。体温計がついているもの、はさみがついているもの、何か面白いものを作りたいのだと思います。その後も、ラジオとテレビとカセットテープが一緒になったラテカセとか、カメラに液晶がついているビューカム、そういう世の中に無いものを、作りたい、作らなきゃいけないんだ、という社風がある会社です。

私がいるオンリーワン商品・デザイン本部は、副社長直轄で、商品の横断的戦略や商品企画、ユーザー調査や、ネットサービスを運営している部隊もいます。そして、

UI開発センターという我々の部隊があって、デザインとソフト開発が一緒にいます。こういうメンバーが一体となって、世の中に無いものを生み出していこう、というのがオンリーワン商品・デザイン本部です。

私自身は、学会発表したり、論文を書いたりもしますが、モノづくりの現場の人間で、アイコンを描いたり、GUI画面を考えたりするインターフェースのデザイナーです。ただ、美大を出て、会社に入った後、もうちょっと勉強しないと新しい分野のものを創っていけないな、という思いもあって、修士で認知科学、博士後期で人間工学と情報デザインを学びました。そして、ユーザーセンタードデザイン(UCD)の考え方に立ち、商品のUIを開発していこうと考えました。マネージャになってからは、お金の計算とか、人の段取りとか、そういうことが増えてきましたが、シャープのUIのアイデンティティやブランドを確立していきたいと思っています。

「使ってみたいを考える」ですが、デジタル家電の多くの機能が、お客様のところで使われていません。一生懸命デザインし、徹夜して実装し、やっと商品にしても、便利だと思った機能が使われていない。そういう話をしますと、「使いたくない人にまで使わせなくていいんじゃないか」、「使われない機能を載せるメーカーが悪い」と言う人もいます。本当にそうかなと、ユーザーのお宅を訪問調査させていただいたりしますと、ご高齢の方でも「電子番組表って知らないな」と言いながら、半年、一年経って再訪問して聞いてみると、何かのきっかけで使い始めていて、「結構便利なんだよ、今では必ず電子番組表ボタンを押して、誰が出ているのか、何時に終わるのか見えています」とおっしゃることがあります。実際、デジタル家電には、メールのように、耳が聞こえづらくなったお年寄りの方にこそ便利な機能がありますし、水蒸気で余分な脂を落とすオープンも、健康が気になりだした中高年齢の方に使っていただきたい商品です。そういう機能を、何とか使っていただきたい。デジタルデバイスには、使いづらい、使えない、ということだけではなく、使おうと思わない、使いたくない、ということが含まれていると考えています。そのために、使ってみたいと思わせる仕掛けのあるモノづくりが重要ではないかと思えます。ユーザビリティテストは、使えない部分を無くし、マイナスを土ゼロにもっていく取り組みとして、非常に重要ですがけれども、それだけでなく、使ってみたい気持ちを起こすような取り組みをやらないと、と思う

訳です。

使ってみたい、という気持ちには、動機を發動させる部分と、継続させる部分の2つのフェーズがあります。マーケティングの考え方では、興味があって、使ってみようと思って、購入してもらうのがゴールです。しかし、UCDの考え方では、使ってみようと思わせる上で、さらに実際に使えて、なおかつ使った結果、長く使いたいと思え、「ずっと使えて次もシャープ」というサイクルが回ることが必要です。それによってシャープのユーザーインターフェース、商品のブランドも上がっていくということになります。

使ってみようと思う、長く使いたいと思う、というのは、どういうふうになるのか研究しました。まず最初に、興味を持ってもらわないといけません。次に、使えそう、と感じさせることが大事です。実際に使えるかという部分は、人間工学的な操作、使い方が理解できる、そういう認知的な部分を含めて必要です。その上で、長く使いたいと思うためには、期待以上に驚いて、満足が持続する必要があります。

常磐大学の伊東昌子先生らが、高齢者のICTの利用に関する報告書を出されていますが、ユーザビリティは、従来の定義、「効果、効率、満足度」ではない、とおっしゃっています。使ってみようと思う「誘因性」、実際に使いやすいという「操作性」、それから「社会的サポート」、そういう3つの要素をあげられています。それらを参考に、ユーザーへのインタビュー、訪問調査の内容を見てみると、結構、新しい技術や機能や、外観、デザインへの興味から、使ってみよう、と思う方が多いのです。その上で、馴染みのある使い方であったり、一目で簡単そう、「ボタンが少ないから簡単そうだな」というふうに感じられたり、そういうことから、使えそうに感じると。ただ、難しいことに、興味を持っているし、使い方も分かりそうだが、と言っている、使っていない方が多いのですね。では、実際に使ってみた、踏み切った理由は何だかというと、他の機械が壊れて使うしかなかったとか、どうしても韓流ドラマを見たいからYouTubeを見たとか、そういう使わざるを得ない状況、あるいは、第三者が便利だよと教えてくれて、というのも多いのです。

実際に使えるか、というのは、認知、理解、操作、フィードバックの確認、という4段階で見えています。そこから先、長く使いたいと思うか、ということですが、広島大学の戸梶先生が、感動体験の研究をしておられます。

その中で、感情的に深く関わった状態で、予想と違う、ギャップがあると感動する、例えば、映画タイタニックを見ていて、最初、二人のラブストーリーに引き込まれた状態で、一転して大きい事件があって、最後に感動して、涙が流れると。商品も同じで、使ってみて「期待したよりいいじゃないか」という部分が、長く使いたいという気持ちを起こさせます。その上で、満足が持続して長く使えるには、例えば、スマートフォンに自分でアプリケーションを追加していける、そういうベネフィットが続く柔軟なシステムだったり、故障せずに、満足できる品質が続くということが重要です。使用を動機づけるプロセスが回ることで、使ってみたいと思って、実際に使って、長く使えるというふうに考えます。

私は評価もやりますが、ユーザビリティテスト以外にも、使ってみたいかどうか、デザインの初期段階で、受容性調査をしています。そのときに、「使ってみたいですか？」という問いに対して、半数以上の人々がポジティブに答えたときには OK、という使用意向指標を使っています。また、お客様が実際に使われた後に、評価していただいたり、商品別の満足度調査も行ないます。

具体例として、フリースタイル AQUOS というテレビがあります。テレビとチューナーが別にあるとあって、テレビにアンテナ線が無く、本体が薄くて軽いことから、取っ手をつけて、持ち運べるデザインにしました。それに対してリモコンも、手の中に入るシンプルなものにしよう、ということで、操作部をグルグル回せる卵型を考えました。操作部を回すと、テレビの画面が小さくなって、円形の動きと合わせて、チャンネルが選べるものです。この動きが「おっ」と言わせる部分で、記者発表や市場でも好評で、お客様に、「これは楽しそうだからやってみよう、うちでもグルグルしてみよう」と思わせる UI が提案できた例です。

次の事例は、ウォーターオープンレンジ・ヘルシオという商品です。非常に高温の水蒸気で加熱するもので、例えばフライの余分な脂を下に落として、ヘルシーなお料理ができます。この右側にあるのが 4.3 インチのフルカラー液晶で、タッチ操作になっています。社内では、コストアップにつながるため「モノクロ液晶や、ダイヤルやキーを付ける方式でもいいじゃないか」と反対意見もありました。そこを、関係部門と一緒に、実際に画面に触って動くモックアップを作り、良さを体感してもらい、商品化しました。そして、お客様がヘルシオを購入

した理由を聞くと、3 割近くの方が、タッチ操作が使いやすいそうだから、カラーの液晶が綺麗だったから、とデザインに関する理由をあげていました。購入動機の 3 割というのは、大きい数字です。お料理ブックがレンジの中に入っている、というコンセプトだったのですが、カラー液晶に楽しい料理のレシピを入れたり、タッチで簡単に操作できることで、使いこなしてもらいたいと考えています。

最後は、点から面への活動へ、という今後の課題です。企業の中で UCD 活動をやっている、設計・評価プロセスと比較して、その前のプロセス、利用状況を観察して、そこから UI の要求事項を出す活動は、まだまだ小さいです。また、設計後の評価のプロセスは、足の長い商品、複写機、ヘルシオなどではできていても、サイクルの短い製品はできていなかったり、事業部によっても温度差があります。今後の課題は、会社全体の色々な商品群や開発プロセスの中に、ユーザーセンタードデザインという活動を、恒常的に組み込んでいくことです。なかなか難しく、何が一番効くかという、活動の効果の見える化、定量化なのかなと最近、考えています。例えば、社内で使っている指標として、コールセンターへの問い合わせ件数があります。改善した新商品が出たときに、件数が何割減ったとか、そういう指標を使っています。これも、対策したところは減るけれども、新機能が追加された部分で逆に増えたりして、決定打ではありません。

以上ですが、皆様から、UCD プロセス導入に関して、ベンチマークさせていただけるようなところがあれば、ぜひお願いします。成功事例だけでなく、失敗事例などもお話しをお聞かせいただければと思います。

(報告：永野行記、松本啓太)

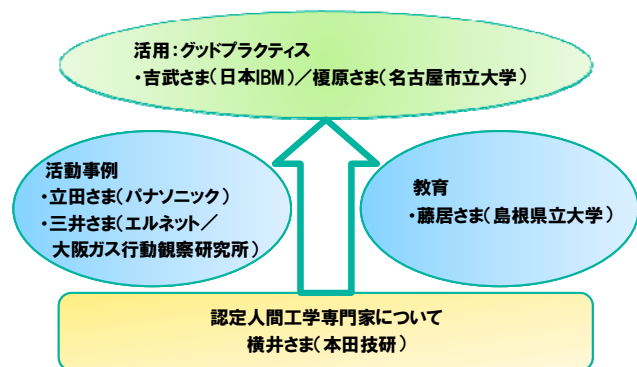
報告

人間工学会第 53 回大会におけるシンポジウム 「人間工学専門家の魅力と実力」

6月9日、10日の2日間にわたり、九州大学において、人間工学会第 53 回大会が開催されました。この中で、「人間工学専門家の魅力と実力」というタイトルでシンポジウムを企画し、開催しました。人間工学専門家に関するシンポジウムは、第 51 回大会（札幌）、第 52 回大会（東京）に続き、今回で 3 回目です。今年のシンポジウムの概要は、

「認定人間工学専門家制度がスタートして今年で 9 年に

なり、来年は、第一期認定者の2回目の再認定の年となる。これまで、192名の方が人間工学専門家として認定され、多方面で活躍されているが、「専門家」ってどういうことだろうか？という素朴な疑問に対しては、一言で返答しきれないところもある。本シンポジウムでは、その答えを探るべく、専門家としての魅力やその実績を紹介し、多くの方の専門家に対する理解を深める」であり、ここに示してある目標に向けて、「基本的考え方」、「活動事例」、「教育」、「活用」の観点から、以下の構成で5件の発表が行われました。



発表構成

1番目の「認定人間工学専門家について」は、専門家にとってはこの認定専門家という資格について再認識するために、また、これから専門家を目指す方にとっては、この資格はどういうものなのか、の理解を深めるために重要な内容でした。2番目の「活動事例」では、2件の発表があり、それぞれの企業の立場で、いかに専門家として活動していくか、専門家の資格を有することでのメリットなどについて、具体的な例とともに紹介されました。3番目の「教育」では、短期大学の視点で、「人間工学アシスタント」を養成するために、どのような教育が必要なのか？大学以前にやれることがあるのではないのか？といった興味深い発表でした。最後の「活用」については、今回の大会から採用された「グッドプラクティス表彰制度」の概要とそこにおける人間工学専門家の役割及びその重要性が紹介されました。発表後に会場からは、グローバルな視点での取り組み、もっとメリットが示せるような取り組み効果の情報発信、教育の重要性、などが意見として出されました。

初日の最初のセッションで、受付の裏側にある最も広い会場を使わせていただき、そのおかげもあって、100名ほどの方に参加いただき、非常に活発な意見交換がで

きました。

まだまだ専門家資格を広めていくにはやらなければならないことがあるということも改めて感じさせられました。来年度以降も継続して企画を立てていきたいと思えます。

(報告：福住伸一)

➤ **ご案内**

Asia Pacific CHI 2012 (APCHI2012)について

Asia Pacific CHI 2012 (APCHI2012)という国際会議が2012年8月28日(火)～8月31日(金)に島根県松江市の、くにびきメッセで開催されます。

<http://apchi2012.org/>

ここで、Industrial session として、認定人間工学専門家を中心とした、専門家(及び専門家がいないチーム)の活動紹介をする場が用意されています。興味のある方は是非ご参加ください。

(福住伸一)

● **認定人間工学専門家の新規登録**

新たに準専門家として認定された方々をご紹介します。(敬称略)

【認定人間工学準専門家】

(7月1日認定) 長野真行、畠田賢治、本田俊太郎、山口美香、脇坂和也

○ **会報バックナンバー**

<http://www.ergonomics.jp/product/newsletter.html>

○ **会報、編集委員会へのご意見、情報提供は**

e-mail : cpnewsletter@ergonomics.jp

〒107-0052 東京都港区赤坂 2-10-16 赤坂スクエアビル2F

日本人間工学会事務局

会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

【編集委員会メンバー】

松本啓太(編集委員長)、青木和夫、城戸恵美子、斉藤進、永野行記、藤田祐志、吉武良治